

〈コラム〉

「絆でなく柵」

北村 薫*

Kaoru KITAMURA*

社会学は「常識破壊の学問」といわれることがあります。多くの人々が「当たり前」と思っていることに、「ちょっと違うんじゃないの!」という主張をすることが多いからです。本コラムもそのひとつとしてお読みいただきたいと思います。

「絆」とは何でしょうか? 「絆」とは、もともとは、馬や牛等の家畜を木や杭に括り付ける綱のことでした。それが転じて、人間を特定のポジションに縛りつけるものという意味が付与されました。社会学者のフロムは、ナチスのファシズム研究のなかで、以下のような主張をしています。

中世の人々は教会や階級といった権威的な絆によって地域社会と強く結ばれていました。その絆から人々を解放したのが市民革命であり、産業革命であり、近代社会なのです。人々が絆から解放され、自由な人々が増えること、これが社会の近代化の指標でもあるのです。しかし、近代の人々は、自由を得た代償に「安心」を失い、バラバラな個人に分解され、孤独化しました。宗教改革で有名なカルヴァンやルターは「孤独を救済する」道として、彼らの宗教に絶対的な権力を付与しました。それまでの教会や階級による絆にかわる、新たな権力に人々を結びつけたのです。この基本線は、ナチスドイツも同じだったとフロムは言います。

ヒトラーは、産業革命後の近代社会の形成、自由の獲得のなかで、人々が不安で、孤独な状態に置かれていることを見事にキャッチし、自らが「神」となり、人々を権威に縛り付ける新たな「絆」を形成

することでファシズムを完成させたのです。

近代社会の形成にとって「絆(きづな)からの解放」こそが目指されることなのです。社会学者として、大震災以降の「絆」の連呼に違和感を覚えます。別の表現をすれば、フロムの言う「自由からの逃走」, 「強い権力への積極的服従」を思い起させる社会状況が進行しているのではないかという危惧を抱いています。

一方、「柵」はどうでしょう? 柵という漢字は通常「さく」と読みますが、ここでは「しがらみ」と読んでいただきます。空気の中にあると「さく」、水中にあると「しがらみ」です。「しがらみ」は、現在、ネガティブな意味で使われます。しかし「しがらみ」の語源は「木除杭(きよけぐい)」とされ、増水の時、流木等が橋脚を直撃しないように防ぐ柵(さく)です。そこに流れてきたものが纏わりつく様から「しがらみ」=纏わりつくものとなり、人間関係の困難さを表すようになったとされています。もともとは、橋脚や土手を守るもの、水の流れを穏やかにするものが「しがらみ」なのです。

私たちは様々な「しがらみ」によって守られています。家族の「しがらみ」、地域社会の「しがらみ」、出身高校の「しがらみ」、職場の「しがらみ」等々。それはある意味では面倒くさいものです。夏目漱石は『草枕』の冒頭に、「智(ち)に働けば角(かど)が立つ。情に掉(さお)させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」と書いています。明治時代も、現代も、人の世は住みにくいのです。それを前提にして、「しがらみ」に守られて生きて行く人生、そういう人生設計もよいものと思いますが、いかがでしょうか?

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University